どんぐり

No.54

兵庫県立
南但馬自然学校
HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO
(Nature Education Center)

自然学校って？

兵庫県立南但馬自然学校
校長　森本雅樹

「自然学校って何？」

今更こんなことを聞かれても困ってしまいますね。

自然学校から帰ってきた子どもたちが、「どう変わったのか」「何を得たのか」「何に感動したのか」等をもとに、子どもたちの変容を捉えての答えはいろいろ考えられると思います。

その中の一つがハッキリそうだと言い切る人もあるかも知れません。でも、自然学校のことをもっと漠然とお考えの方も多いことでしょう。

今度は子どもたちに「自然学校って何？」って聞いてみましょう。子どもたちは、「友だちと暮らす」「飯ごう炊さん」「キャンプファイヤー」「おうちにお手紙」などなど、実際に活動した中で一番印象に残っているものをあげるのかもしれません。

話は変わりますが、学習の効果が評価できる勉強というものがありますね。算数、国語などの教科では点数、体育や図工などの実技教科では、記録、作品の完成度などではかることができます。

そこで、自然学校みたいな漠然とした活動でも、「何のために実施するのか」と目標を設定すれば、活動後の振り返りで「効果」が「検証」できます。

私は自然学校に来ている子どもたちの活動の中に入ってみたことが何回かありますが、振り返りによって、

「子どもたちが何を得たのか、得なかったのか」が確かにわかり、（目標を設定することで評価ができそうだな。振り返りって優れた方法だな。）と感じました。ただ、おおらかなイメージの自然学校からすれば、チョッと堅苦しいかなとも思いました。

「勉強っていうのは本来堅苦しいものだ、堅苦しくない勉強があればお目にかかりたい。」なんて言われてしまえば、少し分が悪いなとも思いますが・・・。

でもこれって、自然学校の目標を設定して、その場合の効果を評価するのですから、「自然学校って何？」の答えにはなりません。答えにならないのなら、「おまえたちは目標なしで自然学校をやっているのか」と聞かれちゃいそうで、やっぱり困っちゃいますね。

考えてみたら算数みたいなきっちり答えの出る教科だって「点数」をとること一つだけが目標ではないでしょう。自然学校のようなものであれではなおさらハッキリしないのではないかと思います。もっとハッキリしない「人生」なんてものを持ち出せば、そこでの目標は自分で探し出し、自分で掴むものなのでしょう。

いろんな立場、いろんな目標の中から、一人一人が自分にぴったりの物を見つけ出していくことを支援していく、それが「教育」かなと思います。

こんなお説教みたいなことを書くつもりってなかったです。

でも、それも人生ですかね。

表紙の写真

キビタキ

水を浴びるキビタキです。

黒と黄色に彩られた夏の渡り鳥キビタキは、姿だけではなくさえずりも艶やかです。その声は、オーケストラなどで使われる“ピッコロ”という小さな横笛の音色にそっくりで、複雑な節回しの中に他の野鳥のさえずりを即興で取り入れる、生まれながらの音楽家ぶりをみせてくれます。

自然学校の事前・事後指導を考える

兵庫県立南但馬自然学校
主任指導主事兼指導課長
高見英明

〈自然学校の弾力的な実施〉

昨年度まで自然学校の実施日数は5泊6日と決められていたが、今年度からは「4泊5日以上とする。ただし、4泊5日の場合は、事前(事後)の体験活動を充実させることとする。」と自然学校実施要項に示された。このことにより、各学校において、4泊5日だけでなく、6泊7日等の長期の自然学校も可能となり、子どもの実態を踏まえた弾力的な自然学校が実施できるようになった。

〈事前・事後の体験活動の充実〉

4泊5日で自然学校を実施する場合は、小学校3年生で実施する環境体験事業との関連を図ったり、事前・事後の体験活動の充実により、5泊6日と同様の効果が期待できる。例えば、①事前に学校で火おこし体験を行った後、自然学校で飯ごう炊さんを実施する、②事前に学校でロープワークを実施した後、自然学校で隠れ家づくりを実施する、③自然学校で星空観察を実施した後、学校で再び星空観察を実施して環境の違いによる星の見え方を調べる、④自然学校で田植えや芋の植え付け体験を実施した後、秋に成長を思い描きながらまたその施設に出かけ、稲刈りや芋掘り体験を実施するなどである。

〈事前・事後指導の充実〉

次に、事前・事後指導について考えてみたい。

適切な事前・事後指導がなされた際に、子どもたちが一回りも二回りも大きく成長したと実感することがある。

例えば運動会。どの学校でも運動会では、ねらいや具体的な活動を子どもたちに説明し、主体的に取り組めるような仕組みを考え、取り組ませる。また、やり遂げたことに対して適切に評価を行う。その結果、運動会後は、特に高学年の子どもたちは見違えたかのように成長したと感じることが多い。それは、自分たちが運動会の成功に貢献できたという達成感、充実感、やればできるという自信等からくるものであると考える。

私は、事前指導とは、ねらいや具体的な活動内容をわかりやすく子どもたちに伝え、子どもたちが学習(行事)が楽しみだ、自分たちでこのようにやっていきたいという意欲を持てるように指導すること、事後指導とは、学習(活動)後に子どもたちを適切に評価することで、達成感、自信等を感じとらせたり、道徳的価値の定着を図ることではないかと考えている。

〈プログラムデザインと振り返り〉

自然学校に置き換えてみると、事前指導が「プログラムデザイン」に基づいた指導、事後指導が「振り返り」に基づいた指導にあたるのではないかと考える。

プログラムとは、一つ一つのアクティビティー(活動)を組み合わせ、目的を持った一連の流れのある全体の活動のことをいう。プログラムデザインとは、自然学校のねらい(目的)を実現するためのプログラムづくりであり、「思い」「ねらい」「テーマ」をアクティビティー(活動)という目に見える「動き」「形」を用いて構成するものである。「思い」「ねらい」「テーマ」がなく、効果の高いと思われるアクティビティーの羅列だけでは、よいプログラムとはならない。

充実した自然学校にするためには、何をねらいとするのかを明確にし、子どもたちがやり遂げ達成したとき、協力できたとき、これまで学んできた知識を活用し、さらに探究できたとき等々、その時々の振り返りを大切にして、指導と評価の一体化を図っていく。また、自然学校発表会や自然学校を通して集団としての高まりを生かす場面を設定するなどの活動(振り返り)も考えていく。タイムリーな評価が、子どもたちを一回りも二回りも大きくしていくと私は確信している。

〈「ワクワク、ドキドキ」の自然学校を〉

20年3月に―自然学校推進事業20年目の検証「生きる力を育む自然学校」―が出されているので、これからの自然学校を考える上で是非参考にしてほしい。

また、具体的な実践事例については、平成21年3月に「自然学校実践事例集」が出されているので、こちらの方も参考にしてほしい。

どちらの冊子も各学校に配布されている。兵庫県教育委員会のホームページからもダウンロードできるので、読み返していただければ幸いである。

最後にお願いがある。先生方自身が「ワクワク、ドキドキ」できるようなプログラムを、是非ともデザインしていってほしい。そうすれば、きっと子どもたち自身も「ワクワク、ドキドキ」するだろうし、そのことが必ずや「生きる力をはぐくむ」自然学校につながっていくのではないかと私は確信している。

今後の自然学校の推進方策と実践への期待

兵庫県教育委員会義務教育課

近年、自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況等が、子どもの課題として見られる。こうした状況を踏まえ、新学習指導要領において、自然の中での集団宿泊活動など、自然に親しむとともに、好ましい人間関係を形成したり、連帯感を深める体験活動の充実が示されたところである。

また、平成20年から、一週間程度の長期宿泊体験を通して、社会性や豊かな人間性をはぐくむため、総務省・農林水産省・文部科学省が連携し、「子ども農山漁村交流プロジェクト」を実施している。

これらの国の動向は、20年以上前から全国に先駆けて取り組んできた兵庫県の自然学校をモデルとするものであり、自然学校の教育的役割は益々重要性が増している。

さらに、平成19年度から計画的に実施してきた小学校3年生を対象とする環境体験事業が、今年度から全校実施となり、本県の小学校段階における体験活動の実施体制が整うことになった。

〔自然学校の弾力的な実施〕

県では、今年度から各学校及び各市町教育委員会の判断により、事業の重点化や実施期間の弾力化を図ることができるようにするなど、各学校の創意工夫した取組を支援するよう条件整備を図ることにした。その背景は次のとおりである。

①実施主体である市町や学校から長年にわたり蓄積されたノウハウにより、ある程度実施期間を短縮しても、同様の効果が得られるプログラムの実施が可能であるという要望があったこと

②環境体験事業と自然学校を地域の実情に応じ弾力的に運用することで、より高い事業効果が期待できること

③実施20年を機に設置した「自然学校評価検証委員会」から、自然学校の効果を高めるためには事前・事後の活動の充実が重要であるとの提言を受けたこと

〔今後の推進方策と実践への期待〕

今後、各学校においては、自然学校評価検証委員会の貴重な提言を基に設定した、自然学校を推進する「テーマ」、「充実に向けた6つの推進方策」、そして自然学校の弾力的な実施の趣旨等を踏まえ、事業内容の一層の充実を図ることが必要である。

【テーマ】自然等との感動的な出会い、集団での学びと連帯感、社会的自立へのステップ

方策1 自然学校と他の教育活動との関連を図る取組の充実

（実践への期待）

○ 自然学校の目的を明確化し、自然学校での豊かな学びと総合的な学習の時間との関連を図り、「体験活動プラス探究型」のダイナミックな学習活動の充実

○ 集団活動を通した友だちとの協力の大切さや自然体験を通した命の尊さなど、豊かな体験を通して内面に根ざした道徳性の育成や道徳的実践の質を高めた活動の充実

方策2 事前・事後の学習活動の一層の充実

（実践への期待）

○ 事前・自然学校・事後を含めた全体計画を作成し、テーマ性やストーリーのある事業を実施することで、自然学校を通して、「児童に何を学ばせるか」を明確にした活動の充実

○ 友だちとのコミュニケーションを図りながら、自らの考えを深める上で重要である言語活動を、事前・自然学校・事後を通して意識的に取り入れることによる活動の充実

方策3 学校では得難い体験活動プログラムの一層の充実

（実践への期待）

○ 児童の発想を取り入れたゆとりあるプログラムをデザインすることで、活動にじっくりと取り組みながら、柔軟性や深まりのある活動の充実

○ 自然をフィールドとした感動体験や達成感を得られるプログラムを構成することで教師の専門性や指導力を発揮し、児童の意欲や能力を最大限に引き出す活動の充実

方策4 社会性や自立性等をはぐくむための集団活動の充実

（実践への期待）

○ 長期宿泊体験のよさを生かし、集団活動を通して、人間関係を深めたり規範意識を高めたりする活動の充実

○ 一つのことにじっくり取り組みながら困難を乗り越える、長期宿泊体験ならではのプログラムを意図的に仕組むことで、自立性をはぐくむ活動の充実

方策5 子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実

（実践への期待）

○ 環境体験事業との関連を図り、自然学校を「命」をテーマとした系統的な環境学習の場とする活動の充実

○ 自然学校では、高学年として自己を見つめさせるためにプログラムの選択を取り入れるなど、小学校6か年を見通した体験活動プログラムの構築

方策6 家庭や地域との一層の連携を図る取組の充実

（実践への期待）

○ 自然学校への理解を図ることはもちろん、自然学校での子どもの成長について保護者と意見交換する場を設けることで、自然学校を契機にした広い観点からの家庭との連携の充実

○ ボランティアなどが計画段階から参画することによって、自然学校の体験活動の幅が広がるとともに、家庭や地域と連携した体験活動の一層の充実

方策7 自然学校の弾力的な実施

（実践への期待）

○ 各学校において、子どもの実態を踏まえ、自然学校で育てる能力・態度や環境体験事業との関連を考慮しながら、実施期間を適切に定めるとともに、取組内容を焦点化するなど創意工夫したプログラムを実施することにより、より教育効果の高い活動の充実

○ 体験活動の教育的な価値を最大限に生かす観点から、学校や親元を離れた、より長期にわたる自然学校を実施することで、子どもたちが知的好奇心や探究心とともに、自己有用感や他者との協調性を実践的に学ぶ活動の充実

〔おわりに〕

今後の自然学校の推進にあたっては、平成21年3月に「自然学校実践事例集」を作成し、新学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえながら、具体的な実践事例を示している。なお、この事例集については、各学校に配布するとともに兵庫県教育委員会ホームページにも掲載しているので、積極的に活用し、各学校において特色ある自然学校が創造されることを期待している。

アクティビティー数（活動数）の変化

＝平成20年度との比較から＝

兵庫県立南但馬自然学校　指導主事　高見忠宏

○はじめに

南但馬自然学校で本年度自然学校の実施を予定しているのは、55団体69校となっています。

そのうち、5泊6日で自然学校を実施するのは、1団体4校で、南但馬自然学校以外の施設での活動も含めて、6泊7日の自然学校を実施する学校が1校となっています。

実施予定団体の、96％が、4泊5日と、昨年度よりも1日少ない自然学校を予定しています。そこで、5月から7月にかけて本校で実施された自然学校における※アクティビティー数（活動数）の変化について考えてみたいと思います。

○平成20年度

昨年度5月から7月に南但馬自然学校を利用した学校は、27団体31校でした。その活動数の平均値を実施日ごとに一覧にまとめてみると、表1のようになります。

5泊6日における1日の平均は、2.27活動となり、初日と最終日を除いた1日の平均値は、2.49活動になっています。

表1　平成20年度（5月から7月）の実施日別活動数一覧表　　27団体（31校）の平均値

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	全日程活動合計数	中4日間の平均活動数	1日の平均活動数
アクティビティー数（活動数）の平均値	2.59	2.70	2.63	2.22	2.41	1.04	13.59	2.49	2.27

表2　平成21年度（5月から7月）の実施日別活動数一覧表　　16団体（17校）の平均値

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	全日程活動合計数	中3日間の平均活動数	1日の平均活動数
アクティビティー数（活動数）の平均値	3.13	2.56	2.81	2.56	1.94	13.00	2.65	2.60

○平成21年度

本年度の5月から7月に南但馬自然学校を利用した学校は、新型インフルエンザによる休校措置等により、利用団体は少なくなっていますが、16団体17校が自然学校を実施しています。その活動数の平均値を実施日ごとに一覧にまとめてみると、表2のようになります。

4泊5日における1日の平均は、2.60活動となり、初日と最終日を除いた1日の平均値は、2.65活動になっています。

○比較してみると

本年度の1日の平均活動数は、2.60活動になっており、昨年度の2.27活動よりも約0.3活動多くなっています。

実施日ごとの平均活動数を見てみると、2日目を除いて、全体的に本年度が多くなっています。特に、初日と最終日の活動数が増えており、最終日は2倍近く増えています。

また、初日と最終日を除いた活動数の平均は、昨年度の2.49活動から2.65活動に増えています。

活動合計数を見てみると、昨年度は13.59活動でしたが、本年度は13.00活動で、0.59活動減っています。

活動日数が5泊6日から4泊5日に1日少なくなっていることから考えると、実施日数は6日間から5日間に16.7％減少し、活動数については昨年度の13.59活動から本年度の13.00活動へ4.3％の減少となっています。

昨年度と本年度の活動日数と活動数の減少率を比べると、日数の減少率に対し、活動数の減少率が大幅に少なくなっており、本年度の5日間の活動日数における活動数は、昨年度と比較した場合多いと考えられます。

○これからの実施にむけて

これらの比較から、5泊6日から4泊5日に実施日数が減少したものの、活動数は、5泊6日の実施と遜色のない活動が行われ、各学校が活動数を確保しようと計画されていることが読み取れます。

しかし、全体の実施日数は減っており、活動の占める時間が多くなると、必然的に自然学校期間中の、いわゆる「ゆとりの時間」が減少していくと考えられます。活動数が増え、ゆったりと過ごせる時間が少なくなることにより、児童の疲労が蓄積し、体調不良や事故にもつながります。また、活動数が増えることにより、指導者への負担も多くなると考えられます。

ゆとりのあるプログラムで、自然学校の「ねらい」を達成できる活動を実施するため、各校の創意工夫により、より一層ゆとりのあるプログラムを編成し、充実した自然学校が実施されますことを願っています。

自然学校と安全管理

兵庫県立南但馬自然学校　指導主事　林　潤子

自然学校では４泊５日以上と長期に滞在しながら、色々な活動を行います。家庭や学校を離れ、普段とは違う環境で行う活動は、豊かな自然の中で日常では得難い体験ができます。その反面、多くの子どもたちにとって経験の少ない活動を行うことから、様々な危険を伴い、そのため事故の発生する可能性が高くなります。

安全でケガのない自然学校にするためには、事前に一つ一つの活動について、安全面からも綿密な計画を立てておくことが重要です。計画を立てるポイントとして、

1　下見を充実させ、危険箇所等現地の情報をできるだけ多く得る。

2　適切な安全指導内容を把握し、共通理解を図る。

3　安全管理上必要な準備物を確認する。

4　救急体制を確立する。

5　応急処置を全指導者が習得する。

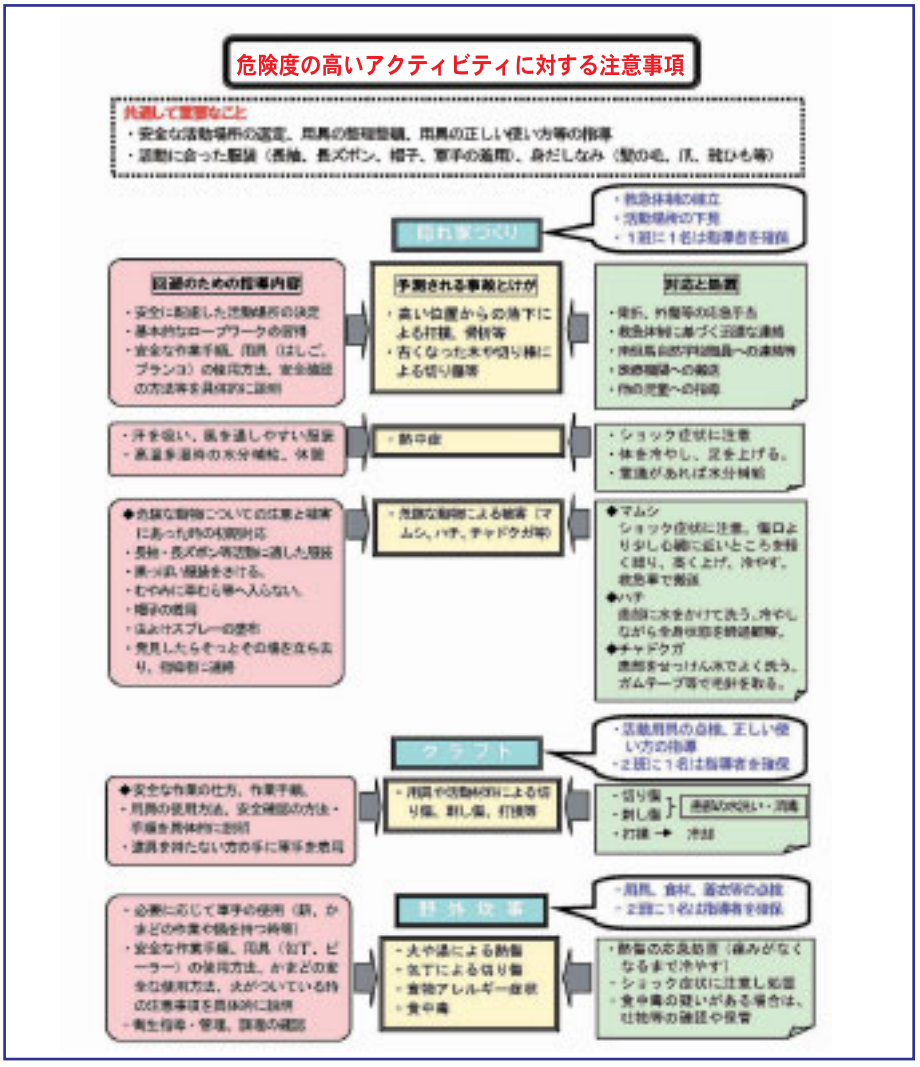
等があげられます。

本校では、平成17・18年度南但馬自然学校研究紀要「南但馬自然学校の傷病記録からみた近年の事故傾向について」において、事故発生件数の多かった「野外炊事」「クラフト」「隠れ家づくり」等に関して、「危険度の高いアクティビティに対する注意事項」を作成しました。

活動に備えた万全の体制をつくるとともに、活動の内容から「予測される事故とケガ」を考慮し、それを「回避するための指導内容」を児童に具体的に指導することで、事故を最小限に防ぐことができると思われます。さらに、万が一事故が起こった時に備えて、「対応と処置」を全指導者で確認しておく必要があります。

今年度の自然学校は、Ｐ５に記載のとおり、全体の実施日数は減っているものの、実施日における１日の平均活動数は多くなる傾向にあります。このことを踏まえ、自然学校を実施するにあたっては、今まで以上に、それぞれの活動における危険因子やリスクマネジメント等の安全管理の基本的な事項を理解し、安全基準を作成する等、事故を未然に防ぐ安全管理体制を計画することが大切です。

自然学校が、子どもたちにとって安全で充実したものになるよう願っています。



『アクティビティ ちょっとひと工夫！』

木のペーパーホルダー

～除伐した木や間伐材でペーパーホルダーをつくろう～

領　域	つくる	活　動	自然物クラフト

＜材料＞
除伐した木、または間伐材（直径５cm～10cm。７cmくらいがベストです！）
針金（ビニールコーティングがしてあるものがよい）
飾りにする自然物（どんぐり、まつかさ等）

＜作り方①＞
除伐した木、または間伐材を適当な厚さに切ります。

※切り口を木工やすりやサンドペーパーでみがくと、なめらかな表面にできます。

＜作り方②＞
針金を適当な長さに切り、紙をはさむリングの部分を作ります。

※棒に巻いて作ると、きれいな形にできます。

＜作り方③＞
木の台に、針金を刺す穴をキリで開け、作り方"で作った針金を差し込み、ボンドで固定します。

※開ける穴が針金よりも大きいと、針金が固定しにくくなります。
※ホットボンドを使うと早く固定できます。

＜作り方④＞
どんぐりやまつかさなどの飾りを付けるとできあがり。

※作った日や場所などの文字などを書き入れると記念になります。

＜準備物＞
のこぎり、きり、ペンチ、木工やすり、サンドペーパー、ボンド(ホットボンド)、作業用手袋　等

☆材料の木は、除伐した木、または間伐材を使用します。林業では、木を育てるために「除伐」という作業をします。除伐作業も体験できればと、只今プログラム開発中です。
【除伐と間伐・・・除伐とは、植林した以外の種類の樹木の伐採のことをいい、農業における除草に相当します。これに対して間伐は、植林した樹木が生長し、混み合ってきた森林で、樹木の育成を促すために間引くための伐採です。】

南但馬自然学校
歳時記

兵庫のイヌワシ

兵庫県立南但馬自然学校
技師　増田克也

天然記念物イヌワシ

国の天然記念物イヌワシは山に暮らす大型の猛禽類です。餌として主に、は虫類、鳥類、ほ乳類などの動物を狩り、1年を通して同じ縄張りの中で生活をしています。イヌワシは北海道から九州まで広い範囲に分布していますが、生息数は全国で400～650羽と言われています。

南但馬自然学校がある朝来市にも1羽のイヌワシが暮らしています。兵庫県全体でも生息数はわずか8羽といわれ、県のレッドデータブックでは絶滅危惧種Aランクに指定されています。

日本イヌワシ研究会兵庫地区の調査では、1960年代には36羽が確認されていましたが、その後どんどん減り続け2007年の調査では、ついに8羽となり、しかもそのうち番いは1組だけとなってしまいました。

先日、その8羽のイヌワシの1羽に運良く出会うことができました。遠く離れた山の上に、翼を浅いV字型に保ち、1度も羽ばたくことなく空を滑るようにぐんぐん迫ってきます。(写真①)「これはイヌワシだ！」と確信してから頭の上を通り過ぎるまで、わずか1分ほどの出来事でした。

翼を広げると2メートルにもなるイヌワシの迫力にはただただ圧倒されます。みなさんにもその大きさを感じてもらえるように、空を飛ぶイヌワシの写真にカラスのイラストを並べてみました。(写真②)

①

山岳生態系の頂点に位置するイヌワシは、自然のバロメーターです。イヌワシの生息する兵庫県には、豊かな自然が残されている証拠です。しかし、数を8羽まで減らしてきたこの現状をみると、「兵庫県の自然は減りつつある」とも言えるでしょう。

その昔、神と崇められ、日本各地に残る天狗伝説のモデルとなったこのかけがえのない大きな鳥が、いつまでも兵庫の空を悠々と舞って欲しいと願うのは贅沢な望みなのでしょうか。

②

◆本校ホームページ"自然のページ"より抜粋、改稿
http://shizengakko.jp/

研修会のお知らせ

自然学校講座

●指導補助員養成コース
●指導者スキルアップコース

期　日	平成21年8月23日（日） ～8月26日（水）3泊4日
対象者	大学生、一般県民、公立学校教員（高等学校10年経験者研修として受講可） 県立南但馬自然学校登録指導補助員、自然学校救急員
経　費	10,500円（全日程参加の場合）
申込方法	「自然学校講座申込書」にて直接本校に申し込む。 （FAX、Eメール可）
受講形態	指導補助員養成コース （全日程参加を原則とする） 指導者スキルアップコース （一日単位の受講を原則とするが、各講座毎の受講も可）
研修内容	23日（日）　講義「兵庫県の自然学校と指導補助員の職務について」 自然体感ゲーム（自然観察） 星空観察・ナイトハイク 自然学校（自然観察） 24日（月）　講義「自然学校・野外活動におけるリスクマネジメント」 キャンプファイヤーの基礎技術 25日（火）　・指導補助員養成コース クラフト 救急救命講習〔心肺蘇生法（AEDの講習を含む）〕 ・指導者スキルアップコース 協議「野外炊事の計画」 実習「食材の調達」 26日（水）　野外炊事 振り返り

南但馬自然学校だより「どんぐり」No.54　●平成21年7月　●兵庫県立南但馬自然学校発行
●〒669-5134 兵庫県朝来市山東町迫間字原189　●TEL (079)676-4730・4731　●FAX (079)676-4008
●URL http://shizengakko.jp/　●E-mail mtajimashizen@pref.hyogo.lg.jp

SOY INK
植物油のみ使用した、環境にやさしいインキです

21 教Ⓣ2-006 A 4